

● 事例紹介 ●

# 桜美林大学プルヌスホールの使命と活動

井上 大輔

（桜美林大学 パフォーミングアーツ・インスティテュート 補助研究員）

工藤 治彦

（桜美林大学 パフォーミングアーツ・インスティテュート 補助研究員）

## 一 はじめに

桜美林大学に総合文化学科（現・総合文化学群）が開設されたのは二〇〇〇年四月、その中には演劇専修、音楽専修、造形デザイン専修があり、二〇〇七年度からは映画専修も加わって、現在は四つの専修で構成されている。学科設立三年後の二〇〇三年四月、本学プラネット淵野辺キャンパス（PFC）内のプルヌスホールがオープンした。

プルヌスホールは演劇専修で演劇・ダンスを学ぶ学生の実践教育のための「教室」であると同時に、演劇・ダンス専門の「劇場」という二つの面を持つ。客席数は最大約二

三〇席、ホールを使用するアーティストの創造性の刺激と表現の可能性の拡大を目的に、段数を状況に応じて変えることのできる可動式の客席や、スタジオタイプの舞台構造を採用。利用者が利用しやすい劇場として、様々な工夫が凝らされている。また、その管理・運営は本学の研究所であり劇場内に部屋を持つ「桜美林大学パフォーミングアーツ・インスティテュート」と学生組織の「桜美林大学劇場コミッティ」が協力して行なっている。

## 二 ホールの役割

プルヌスホールの「劇場」としてのミッションは「地域の芸術文化に貢献する」ということである。これは演劇専修のミッションである「地域の文化活動の中核を担う人材を育成する」ということとリンクし、日本各地の公共ホー

ルの抱える問題を意識して定められた。即ち、これま

での公共ホールが、地域の芸術振興という視点を持たないままの「貸し館」や「買い公演」中心の運営がなされてきたからである。本来、公共ホールは地域の芸術文化の拠点であり、地域の芸術文化の環



プルヌスホール

境に対して責任を負って然るべきはずである。しかし、そのことに気づき始めたのはようやくここ二〇年のことだ。プルヌスホールは私立大学の施設ではあるが、そこで行なわれる教育が公共性を持つと同様に、劇場としての精神も利益追求型の民間劇場ではなく、あるべき公共ホールの姿を追求している。演劇専修の教育方針と連動しながら、また、教育活動を通じて地域に貢献し、地域貢献を通じて教育に役立たせるという循環を意識しながら、その持てる知財、人材をフルに活用し「創造・育成・鑑賞」という三つの視点を軸にした事業を積極的に展開している。

## 三 活用・活動の状況

① 桜美林大学パフォーミングアーツプログラム（OPAP）  
オパップ）

演劇専修では、プルヌスホールで年五本ほど『桜美林大学パフォーミングアーツプログラム（通称OPAP）』という教育プログラムに基づく演劇・ダンス公演を実践している。このプログラムは演劇専修生の、いわゆる発表会レベルではなく、一般の鑑賞にも堪えうる高いレベルの公演を行うことをコンセプトとしており、毎回、坂口芳貞教授、

木佐貫邦子准教授、高瀬久男准教授、鐘下辰男専任講師という錚々たる本専修講師陣をはじめ、第一線の演出家・振付家が指揮を執り、オーディションによって選出された学生が出演、スタッフも学生が務めている。このプログラムの大きな特徴の一つが、およそ一〜二ヶ月ほどの稽古期間のうち約一ヶ月間は上演会場となるブルヌスホールで稽古を行うという点だ。日本の創作現場において公演会場で一ヶ月稽古をするといった環境はほとんど整備されていない。しかし、劇場を作品創造の場として認識している欧米ではよく行なわれている。それは先にも述べた、劇場が地域の芸術環境の責任を負っているという認識とともに、上質な作品の創造と発信が地域の誇りへと繋がっていくという確信があるからである。

OPAPではこれまでに様々な作品を創ってきたが、書き下ろしの新作としては、二〇〇三年度、二〇〇四年度にOPAP+青年団合同公演・平田オリザ作・演出『もう風も吹かない』（二〇〇四年度はJICAの国際協力五〇周年記念公演として全国八箇所で開催）を、二〇〇七年度には本専修の非常勤講師でもある新進気鋭の劇作家の岡田利規作・演出による『ゴースト・ユース』を上演し、演劇界の話題にもなった。

を核としたカンパニーの選定や金銭的な面も含めた交渉、受け入れを行なっていくことでアートマネジメントを実践的に学ぶことができる。

③ 地域に芸術を届けるアウトリーチ企画

「パフォーミングアーツ・インスティテュート」では、演劇専修のゼミと協力して本学の立地する東京都町田市・神奈川県相模原市を主な範囲としたアウトリーチ活動も展開している。これは、劇場に自ら訪れることが難しい方や、これまで芸術にあまり触れてこなかった方の元へ出向いて芸術に触れてもらおうという活動である。大学病院が地域の療養のセンター的役割を担う場所であるとしたら、大学の劇場は地域文化のセンター的役割を担う場所である。大学が保有する授業や研究などで培われた知識や研究成果は、地域に還元されていくべきである。

プログラムも地域在住のプロ・アーティストと学生が協力して作り上げるものや学生自らが考案し出演するものがあり、今まで地域の幼稚園、小学校、中学校、養護学校、老人ホーム、身体障害者療養施設などに出向き、ミニコンサートや演劇公演を行なった。また外に出るばかりでなく、ブルヌスホールの入っているプラネット淵野辺キャンパス

② 学生主体による舞台芸術祭『GALA Obirin (ガラ桜 美林)』

演劇専修では学生が有志で「桜美林大学劇場コミッティ」という団体を組織し、劇場の管理・運営を自ら行っている。その活動の中で毎年『GALA Obirin』という舞台芸術フェスティバルを開催しており、ブルヌスホールもその主要な会場となって招聘公演や講演会などが催されている。このフェスティバルの目的は二つ、一つは地域への芸術鑑賞機会の提供と舞台芸術の振興、もう一つは学生のアートマネジメントや劇場運営に関する実践の場として機能することである。そのため、顧問を務める講師陣のアドバイスのもとで学生がフェスティバルの企画進行業務のすべてを行なっている。

これまでに、海外での活動も盛んなダンスカンパニー「コンドルズ」、「BARTER」、「ニブロール」や二〇〇七年には翌年の岸田戯曲賞を受賞した前田司郎率いる「五反田団」などを招聘してきた。また、これら若者向けのカンパニーだけではなく、地域の幅広い年齢層、特に家族層への提供も考え「ジャズ絵本」や「人形劇団ブーク」、「子供のためのシェイクスピアカンパニー」など世代を超えて楽しめる作品も招聘している。学生たちは、ブルヌスホール

(PFC)のガラス張りのロビーも会場にして、通りがかりの方にも気軽に立ち寄ってもらえるような工夫を凝らしている。

④ 小学生対象ワークショップ企画『劇場であそぼう』

授業関連以外の活用として、「パフォーミングアーツ・インスティテュート」が自らプロデュースする事業を二〇〇七年から年二本開催している。その一つがブルヌスホールの立地する相模原・町田地区の小学四年生から六年生の一六名（公募による抽選）を対象とした『劇場であそぼう』というワークショップ企画である。これは参加者がプロのアーティストの指導で数日間のワークショップと、最後にミニ発表を行なうという内容で、昨年は『音とあそぼう』と題して舞台音楽家のタナ川ヒロ子氏を、今年は『からだとあそぼう』と題してコンテンポラリー・ダンサーの伊藤キム氏を迎える。本学学生がアシスタントに入ること、学生に対する実地教育も兼ねている。

⑤ 市民参加企画『群読音楽劇 銀河鉄道の夜』

もう一つのブルヌスホール・プロデュースが、群読音楽劇『銀河鉄道の夜』である。声と音で綴る銀河鉄道という

新しいスタイルのこの舞台は、市民と学生とプロのアーティストが参加することを特徴とし、出演者は桜美林大学生と一般市民のオーディションで選出、プロデューサーおよび脚本・演出はパフォーミングアーツ・インスティテュート所長の能祖将夫准教授が、音楽監督はジャズピアニストの佐山雅弘氏が、照明は本学専任講師である文学座の金英秀が務め、地域の文化財団などの協力も得て行なう比較的大きな規模の企画である。参加者の対象年齢は二三歳以上で、昨年は七十二才までの八七名が、

今年は一才までの一八一名がオーディションに参加、そこで選ばれた様々な年齢構成の二三名十二名のミュージシャン十一名のコンテンポラリー・ダンサーの計二六



群読音楽劇「銀河鉄道の夜」2007年上演  
写真：福井理文

名が共に五日間の舞台稽古を行い、そのあと三日間四ステージの本番を上演する。一見、短い稽古時間と見えるかも知れないが、そこで過ごす時間には濃密なものがあり、舞台成果の質の高さには目を見張るものがあると評価された。前述の『劇場であそぼう』と同様、この企画では、市民と学生とプロが共に創造活動を行なうことで芽生える新たな交流と、地域の芸術振興を目的としている。

#### 四 おわりに

桜美林大学ブルヌスホールは、“大学の、そして地域の教室であり劇場”である。学生も地域住民も、このホールで芸術に触れ、芸術を学び、芸術を創造する。そうすることで学生も地域も育っていく。今後もブルヌスホールは、そんな“場”を目指して活動していく。